

特集 ⑤

若返り玉手箱

「移住交流で学校を救え」

まちづくり学校 双海人 用夢員 本多 正彦 (伊予市)



学校を救え

5年前、中学校の統廃合で地域から母校が1つ消えた伊予市双海地域(旧双海町)。近年過疎・少子化が進む中山間地域が、目を背けていた現実を直視させられた瞬間でした。このままいったら次は？

双海には、愛媛県最古の現役木造校舎をもつ翠小学校があります。山あいに建つこの美しい学校に通う児童は15人、校区の少子化は地域でも頭抜けています。これ以上母校を無くしてはいけません。「学校を救え」これが地域での移住受け入れ機運が高まるきっかけになりました。

住民主導ですめる移住交流事業

双海での移住交流促進は目的が学校を守るため。必然的にターゲットは子育て世代となります。しっかりと目的を掲げ、ターゲットを絞った呼び込みをする、これは住民主導で行う大きなメリッ

トです。地域の皆さんが危機感を持つて「誰まり」ではない、「共に地域のことに取り組む仲間」を探そうと活動しています。それを行ってのが「まちづくり学校 双海人」、学びと小さな実践で地域活性化を目指している住民団体です。

空いてるのに貸してくれない

地域に空き家はいくらでもあります。でも「使わせてもらえない空き家」はほとんどありません。その理由はたくさん。荷物がある、仏壇が、墓参りの休憩所、傷みがひどい、いつか帰ってくるかも、でも結局のところ「知らない人に貸すことへの抵抗感」なんだと思います。当然だと思えます、そんなこと過去にほとんどなかったんですから。

これを促していくにはある程度信頼のおける人や団体が間に入ることで、そして何と言っても特効薬は事例だと思えます。実際に移住者が入り、その地区に子どもが増えたとか活気が出たとかいうメリットが地域の人を通して伝わってくるのです。逆に初期に悪い事例が出てしま

うと一気に機運も消沈してしまう可能性が高いので、立ち上げ段階の今は特に気を使う部分が多くなっています。

地域を知ってもらうために

活動は主に3つです。①受け入れ体制づくり(より多くの方々への理解を得て協力体制を構築し、使える空き家の調査・発掘を促す)、②情報発信(主にネットや移住フェア等で、受け入れ推進を含めた地域PRや移住相談の対応)、③見学・体験の受け入れ(興味を持った方に実際に来てもらい、取り組み・地域・人を見て感じてもらう)です。でも移住プランはこのあとからがスタート。

取捨選択と地域愛

私は自身が移住者でもあるので間に立つ立場として、クッションになることを意識しています。地域が望む人材像なのかという視点も持ち、相談者のニーズを聞いて移住先探しの手伝いをするような感覚です。売り文句で引き込もうとは思いません。なぜなら理解不足やミスマッチ

愛媛県最古の現役木造校舎をもつ翠小学校



子育てファミリーで賑わう移住フェア



ングはその後の定住にはつながってこないと思うからです。

ここは極楽浄土ではない、望むもの全てがあるわけじゃないんです。そこに有るもの無いものは場所により様々。その情報

をできるだけ伝えて、その人なりの取捨選択をしてもらう。これを繰り返すことで望む移住先が整理されてくるんだと思います。

それでもやっぱり文化も慣習も違う人間が地域にきたら誤解を生んだりトラブルの可能性は高くなるでしょう。それを起きにくくするには…?

私は中山間地域への移住は住居を移すことではないと思います。その地域で育まれた文化とコミュニティの中に入れてもらうことだと思うのです。だから移住者の方には①その地域の文化や暮らしをリスペクト（尊重）できるところを・②地域を、人を、スキになれるところを選んでくださいと勧めています。地域の方々にも同じように異文化の



見学者と移住ファミリーたちの交流会も和気あいあい

方が来るという理解を促します。双方にこの意識があることと間に立つ相談者がいることでトラブルは激減できるはず。そうなればお互いがよかったと言えるケースが増えるようになると思います。

暮らしのサポート

「田舎暮らしは人付き合いが大事」と言いますが事実だと思います。なので、見学などに訪れる方、移住に向けて進んでいる方に、できるだけ多くの地元の方々と交流機会作りを心掛けています。まちづくり学校 双海人のメンバーや先輩移住者の方々はもちろん、どんな地域の方々ともつないでいきます。地域のことも知ってもらえるし、いざ暮らすとき、その人脈は必ずチカラになります。

住む前も住んだ後も、そういったサポートは地域住民ならではの。でも私たちには当然のことです。仲間を探してるのだから。

少しずつでも着実に

移住交流事業をはじめ、2年強。全校児童15名の翠小学校区に6人の子どもが増えます（内定含む）。事業開始と時を同じくしてたま

たですが移住ファミリーが増えたことも機運を高める要因になっていきます。

これらを含めると増えた子どもは16人。移住者が入った近所では「子どもの声が聞こえて嬉しい」「また孫ができたみたい」と喜びの声を聞きます。子どもだけでなく移住ファミリーは地域活動などにも積極的に参加してくれる方が多いので評判も良く、「もつと連れてきてほしい」と声をかけられることもあります。また、見学者の町内案内の際「今日は〇〇から移住の見学に来られた方の方内をしてくるんですよ」となるべく地元の方に声をかけて紹介するようにしています。こんなことを繰り返してうちに、

「また来てくるんかい？」と他所から見学者が来ることに地域の方々が少しずつ慣れてきてる気がします。少しずつですがこれがとても大事なことでと思います。

タイミングよく地方創生という追い風が吹いてきておりますが、それに踊らされず着実に、質を意識して取り組んでいきたいと思っています。



まちづくり学校 双海人のメンバー